

『診脈口伝集』の脈法

中川 俊之

日本鍼灸研究会

『診脈口伝集』一卷は曲直瀬道三により天正五年(1577)に著された和文の脈書である。本書は全11葉の横本であるが、日本近世の脈診の歴史において、重要な意味を持っていると考えられることから、記載されている脈状と脈診法を中心に検討を行った。

1 内容と引用医書

『診脈口伝集』は脈診とそれに関わる事柄の要点を28箇条にわたって述べている。脈診の前提、浮沈遅数や二十四脈状(七表八裏九道)の重要視などは、同じ道三の著である『診切枢要』(1566)と類似している。そのうち、中心となる部分は、人迎・気口(左右の橈骨動脈の一部に配当)の浮沈遅数による外感内傷の弁別を述べた「四脈力説」の項と、同じく人迎・気口に二十六脈状を配してその脈證を述べた「対脈ノ二十六状」である。

本書に見える医書名として、本文中に『脈経』が、巻末には『脈経』『脈訣』『察病指南』の名が見えるが、本文中では『察病指南』『三因極一病證方論』が書名を挙げずに引用されている。

2 脈状

記載されている主な脈状は、浮沈、遅数、二十四脈状に更に二脈状を加えた二十六脈状である。

(1) 浮沈遅数……「四脈力説」では先ず『三因極一病證方論』巻一・総論脈式を引いて「診脈ニ博約ノ口伝アリ。博ク弁別スル則ンバ二十四字。……約テ論スル則ンバ只浮沈遅数ノミ」と述べ、浮沈遅数を二十四脈状の中心脈状と規定するとともに、浮沈遅数の有力無力を人迎と気口にて弁別し、風湿寒熱(外邪)、虚実冷燥(内邪)の各脈證を決定する。道三の『医家要語集』(1572)の四脈力弁、『診切枢要』の診切博約にも同様の記載が有る。

(2) 脈状(二十六脈状)……「対脈ノ二十六状」には、二十六脈状の形状、及び気口と人迎の脈證が述べられている。本篇の二十六脈状は「二十四脈ニ数散ノ二脈ヲ加フ」ものであるが、それは即ち七表(浮芤滑実弦緊洪)、八裏(微沈緩濇遲伏濡弱)、九道(細数動虚促結代革散)に長脈、短脈を加えたものであって、『三因極一病證方論』巻一・脈偶名状の内容と一致する。『診切枢要』対体名状もほぼ同様の記載である。ちなみに篇名に続いて「丹溪脈ノ下」の五字が有り、朱丹溪との関連も窺われるが、『丹溪手鏡』(呉尚黙ら校訂。丹溪に仮託した書)巻上・脈第七をはじめとする丹溪の脈書にも合致する記載は少ない。

3 脈診法

(1) 「浮中沈三候」に、浮(左=小腸, 胆, 膀胱, 右=大腸, 胃, 三焦腑), 中(胃気), 沈(左=心, 肝, 腎, 右=肺, 脾, 命門), あるいは『難経』五難の菽法の記載が有り、蔵府診察の根拠としている。

(2) 「左右ノ診察外感内傷」では「外感内傷ヲ弁スルコト専要也」とし、人迎が脈実強では外傷、気口が脈実強では内傷と規定している(人迎と気口の部位は、左右の「寸ト関トノ間」と表現する)。また、「患証ノ内外」には「浮大ナル者ハ病外ニアリ」「沈細ナル者ハ病内ニアリ」とし、かつ「遅数ヲ分別シテ寒熱ノ病ト定ムベシ」という記載が見える。

(3) 「証ト脈ト相反ス」では、病熱脈静、泄而脈大、脱血脈実、汗後脈躁を四難とし、難治としている。これら記載は『察病指南』巻下・審諸病生死脈法の熱病類、泄瀉類、金瘡類、熱病類に各々、同様の記載が見える。

(4) 「反常ノ脈弁」では、平人、病人、長短、壯老、肥瘦とその脈の関係を述べる。『察病指南』巻上・観人形性脈法に同様の記載が見える。